

もう1つの卒業式

本学は、昨年12月29日、第二次世界大戦時学業半ばにして中途退学を余儀なくされた、当時の朝鮮半島出身の元中央大学学生に「中央大学特別卒業証書」を贈呈した。今回、特別卒業証書を贈呈したのは大韓民国の119人の元学生。

大韓民国ソウル市内のロッテホテルを式場に午前10時30分から始まった贈呈式には、高木友之助総長、外間寛学長、水上虎馬雄常任理事、長内了法学部長、北村商学部長のほか、学員会役員、特別卒業証書受領者及び家族、駐韓日本大使館関係者、高麗大学等の交流協定締結大学関係者、学員会コリア支部役員、韓国学員会関係者など約380人が参列して行われた。

式は校歌斉唱に始まり、第二次世界大戦で亡くなられた中央大学関係者に対する黙祷、外間学長の式辞と続き、受領者代表9人に特別卒業証書が贈呈された。次いで、高木総長の挨拶、安東濬韓国学員会会長の祝辞、徐龍澤氏の受領者代表謝辞と続き、高木総長から韓国学員会へ感謝状が贈呈された。その後、受領者全員に特別卒業証書が贈呈され、引き続き会場を移して、特別卒業証書贈呈祝賀パーティーが開催された。

なお、台湾の該当者対象の特別卒業証書贈呈式は、3月14日に台北市で行われた。

韓国元中大生に特別証書

ソウル市内のホテルで挙行

母校に思い深く

贈呈式に出席して

商学部長・北村 敬子

飛行機から見るソウルの街や道路は東京とほとんど変わらなかった。しかし、山に緑が少ない。聞いたところによると、どうも山の表面に土があっても、その内部は岩石であることが多いらしい。古くから磁器の生産で名を知られているのもうなずける。総長、学長を含む中央大学関係者は、12月28日午後3時30分頃、ソウル金浦空港に到着した。

全永鏗会長をはじめとする韓国学員会の役員の方達の盛大な出迎えを受けて記念写真撮影後、街の中心部にあるロッテホテルへ直行する。ホテル正面玄関上に「祝日本中央大学

特別卒業証書贈呈式」の大きな横断幕。ホテル側の中央大学に対する配慮が感じられて良い気分。その日の夜は、同ホテルで韓国学員会前会長の安東濬氏を中心とする、韓国学員会の役員の方々による中大関係者のための歓迎晩餐会が開催された。同氏は、現在は喘息治療のためソウルを離れ地方にお住まいであるが、今回の贈呈式開催にあたってご尽力をいただいたお一人である。

韓国では、日本で失いつつある長幼の序が今なお厳然として残っており、若い者は御長老の前では非常に謙虚である。しかも中央大学を卒業または中央大学に留学された方ばかりのため、皆さん日本語が上手で、和気藹々(あいあい)の雰囲気のうち、楽しい時間を共有し、おみやげまで戴いて晩餐会は終了した。

翌日は10時30分より、いよいよ訪



韓の目的である特別卒業證書贈呈式が行われた。これは、第二次大戦中の1943年に公布された「陸軍特別志願臨時採用規制」によって、学業を断念せざるを得なかった当時の朝鮮半島出身の学生達に対し、特別

措置として、学長から特別卒業證書と記念メダルを贈呈するために開催されたものである。程島学長室長の司会により開式が宣言され、校歌斉唱、黙禱、学長の式辞の後、入学年度、学部、専門部

祝辞を述べる 外間学長

119人に贈呈

予科のグループ別にそれぞれの代表者に、特別卒業證書が学長の手によって渡された。

この日、特別卒業證書を受領するために出席された方は、ご遺族を含めて109名であった。その後、高木総長と韓国学員会安東濬氏から祝辞をいただき、特別卒業證書受領者を代表して徐龍澤氏が印象に残る味わい深い謝辞を述べられた。

贈呈式の様子は、韓国のマスコミにも取り上げられ、テレビでは

長かった年月を振り返る

贈呈式終了後は、別室で特別卒業證書の受領者とその付き添いの方約350人余の出席による大祝賀パーティーが開催された。これだけの人数ともなると、日本では立食が一般的であるが、今回は一人一人が席についてのフランス料理。あまりの多人数にホテル側も慣れないのか、最初のオードブルが配られるまで随分待たされた。一つのテーブルを囲んで、各人がビデオを観、思い思いの話をして、50有余年の長かった年月を振り返った。

受領者の方々は、今回の中央大学

ニユースとして放映された。大正生まれの齢すでに70歳後半のご高齢の方々がかりのため、出席の返事をいただいてからこの日までのわずか数カ月間に、すでに3人の方が亡くなられたと伺い、胸詰まる申し訳ない気持ちで一杯である。まさに学長の式辞にあった「遅すぎた卒業式」を実感した次第である。高木総長からは、わが国の過去の過ちについてのお詫びと新学員になられたお祝いとが表明された。

の特別措置に関して、一様に感謝の意を表して下さったが、内心においては複雑な気持ちであられたことと思われる。そのことが解るだけに、徐龍澤氏の謝辞の中にあつた次の文に強く惹かれるものがある。「受領すべき卒業證書の代わりに、年齢80歳前後、白髪老齢の身になって、特別卒業證書を受領する我が身を顧みて、喜びと共に一抹の淋しさとアイロニーを感じるものがあります」

そして同氏は、母校中央大学に対する深い思いを、淡々とした口調で述べて下さったのである。